## 25 I-131標識Lipiodolによる原発性肝癌の治療効果

島袋国定，前田敏幸，小林尚志，米倉隆治，中條政敬，篠原慎治（鹿児島大学放射線科）

われわれはLipiodolの肝細胞癌に対する集積性に着目し，ヨード基をI-131に置換したI-131標識Lipiodolを用いて，原発性肝癌18例（20回）に対してTransarterial internal radiation therapyを試みたが，その効果について腫瘍縮小効果と生存率より検討したところ，以下の結果が得られた．

結果）

1．腫瘍縮小効果は面積縮小率でPR61%と良好な結果が得られ，AFP値も本療法前の50%値まで低下した症例が71%にみられた．
2．1年生存率はKaplan meier法で46%で，腫瘍部推定照射線量60Gy以上の症例では76%であった．
3．副作用は，一過性の発熱（70%），軽度の肝機能障害（10%）がみられたが，いずれも3週間後には治療前の値に復した．

以上，本療法は原発性肝癌の治療法の1つとして有用と考えられたので報告する．

## 26 血中TPA測定としてのIRMA法に関する基礎的ならびに臨床的検討

高松祐介、村上　稔、福田容子、西川彰治、立花敬三、未廣美津子、石村順治、河中正裕、福地　稔（兵庫医大　核、RI）

今回、われわれはビーズ固相化Tissue polypeptide antigen（TPA）のIRMA法につき基礎的ならびに臨床的検討を行なったのでその成績につき報告する。

基礎的検討では、測定法に要求される諸条件をほぼ満足する成績がえられた。臨床的検討では、健常人51例での血中TPA濃度は平均39.5±22.3 U／ℓであった。一方、結腸・直腸癌、膵癌、胆のう胆管癌、肝細胞癌、食道癌、胃癌、肺癌、乳癌、卵巣癌、膀胱癌を含む悪性疾患150例での血中TPA濃度は平均344±393 U／ℓと高値を示す成績であった。また、従来法との測定値の比較では、両者は$r=0.92$、$y=1.28x-9.0$と良好な相関関係が得られた。

以上の検討成績から、本測定法は測定法に要求される諸条件をほぼ満足しており、従来法に比べ迅速・簡便であり、臨床的にも満足出来るとの結論をえた。

## 27 頭頸部腫瘍と甲状腺腫瘍における血清TPA値の意義に関する検討

中駄邦博，塚本江利子，川村直之，藤森研司，伊藤和夫，古舘正從（北大　核）

ビーズ固相法を使用して操作性が改善された新しいTissue Polypeptide Antigen（TPA）測定用IRMAキットを用いて頭頸部腫瘍と甲状腺腫瘍患者の血清TPA値を測定し、この領域の腫瘍マーカーとしての有用性について検討した。正常例(N=30)の測定結果より、カットオフ値を暫定的に80.0(U/l)と設定した。

頭頸部腫瘍については未治療群での陽性率や経過観察群での経時的変化をSCC抗原値やCEA値と比較した。

甲状腺腫瘍では、手術後の残存・転移・再発例を対象として、サイログロブリン値や$^{131}$I全身スキャンの結果と比較した。

## 28 ヒト肺腺癌に対するモノクロナール抗体130-22を用いた肺腺癌患者血中抗原濃度の測定

松岡洋一郎[3]，遠藤啓吾[1]，佐賀恒夫[1]，渡辺祐司[1]，国松美帆子[1]，河村泰孝[1]，小泉　満[1]，小西淳二[1]，中島鉄夫[2]，中川　毅[3]，山口信夫[3]（京大・放核[1]，福井医大・放[2]，三重大・放[3]）

ヒト肺腺癌細胞株（PC-9）を免疫源として作成したマウスモノクロナール抗体130-22は，卵巣癌関連抗原（CA 125）と同一分子上のCA 125とは異なる抗原決定基を認識していると考えられる。

現在まで婦人科疾患における血中CA 125濃度測定の意義に関しては多数の報告があるが，肺癌患者おいても上昇することが報告されてきている。そこで130-22抗体を用いたIRMAを開発し，肺腺癌患者血清中の抗原濃度を測定したところ65%(13/25)が陽性を示した。組織型別では腺癌33%(1/3)，扁平上皮癌67%(8/12)，小細胞癌100%(2/2)，大細胞癌67%(2/3)で血中抗原濃度が上昇しており，胸水を伴う症例では全例上昇していた。抗体130-22は肺癌の腫瘍マーカーとしての可能性が期待される。

Presented by Medical*Online